

ふるさと雑感

神戸市東区

坂詰幸次郎（黒井出身）

私は長年近畿地方の彼方此方を輻輳した縁で、神戸市西郊に住まいしています。古希を過ぎ往事茫茫となつてしまつた今も、わがふるさとの様子が気にかかります。

私は海辺の旧八千浦村大字黒井の出自です。芭蕉の「奥の細道」に随行した曾良の旅日記七月三日の条に「雨晴、鉢崎ヲ昼時、黒井ヨリスグニ浜ヲ通テ、今町へ渡ス」とあるを見付け、もう故人の生家前本敬寺の前住職に申し上げたところ、畏敬する住職は、芭蕉が黒井に足跡をとどめているのを知つて寺域に芭蕉の句碑を立てたんだよと仰っていました。

故里と言えば、真先に私の脳裏をよぎるのは、何といつても冬に海から吹きささぶシベリアおろしの強風と横なぐりの雪です。私の幼少年期は十五年戦争の最中でしたが、村の小学校に馬の背様の雪

道をマントにくるまつて、歩きに歩いて通学したことなど忘れようがありません。

亡母が雪始末の気苦労を語る折、人間一生同じ住むなら雪の無い所だと愚痴つたことを思うにつけ、雪に縁遠くなつた今

の身の上が不思議です。といつて私は雪の舞う故里を厭う気は全く無く、婦巢本能が波立つのか、雪国を知らない老婆に、どうだい良寛さんみたいに故郷に帰つて暮らしてみる気はないかいと、冗談めかすに、その齡で一体雪の始末ができるんですかと反問され、残念ながらそれともうだねとなるのが才子です。昨今地球温暖化のせい、降雪が少ないようですが、いくら文明が進んでも自然に逆らえず、鈴木牧之著「北越雪譜」に言う雪国の人々の雪始末の苦労は尽きないことでしょう。私は実兄が達者でいてくれるし、上越市内で建設土木業を営み有力企業に育て

た従兄弟たちもいるので、時折帰省しますが、故里の変貌の激しさには驚嘆しています。生家裏手の海辺はむかしを偲ぶよすがはなく、今や海面が埋立てられ、火力発電所ができるご時勢です。帰省のたびに、わが上越市は様変わりして発展しているんだなあ、ただ美しい自然だけは大事にしてねと願つております。

